

大畠大作集 昭和変奏曲

新編日本全国歌人叢書

新編日本全国歌人叢書 11

「昭和菱奏曲」

一九九八年七月十六日 発行

著者

大畠 敏作
おおはた だいさく

発行者

福沢 英敏
ふくざく えいみん

印刷

日本図書刊行会
印刷部

発行所

東京都文京区
目白台二丁目三十二

(株)近代文芸社

電話

03 三九四二一〇八六九

FAX

03 三九四三一 一二三二

落丁・乱丁本はお取り替えます

新編日本全国歌人叢書 11

大畠 大作集 — 昭和変奏曲

目次

平成八年初秋

変奏の	6
怖くない	8
言霊の	10
その日をば	12
戦死から	14
半世紀	16
生れしこと	18
心躍る	20

平成八年仲秋

軍という	22
台風の	24
かの大战	26
手作業を	28
先進の	30
「侵略」と	32
自己ですら	34
役目終え	36

平成八年晩秋

ようやくに	38
杖引いて	40
ひと無論	42
中年の	44
聴く人を	46
やむをえず	48
デモクラシー	50
共産の	52

平成九年冬から春へ

古希われを	54
尊大も	56
人は皆	58
疎に見えて	60
老と死が	62
都の庭に	64
再軍備	66
小雨降る	68

平成九年春から夏へ

破壊への	70
トラクター	72
生涯の	74
三粟の	76
絵筆をば	78
石南花の	80
除草剤	82
わが父祖は	84

平成九年夏

侵略の	86
産業と	88
来世紀	90
列強の	92
あとがき	94
著者略歴	96

平成八年初秋（一九九六・八～九月）

変奏の

変奏の部分に当たるか昭和期は和を基調とする日本国ゆえ

啄木は抒情過多だといわれるも一般人には好かれていたらし

事切れる夫の言葉をその妻が詠んだ短歌を心し読みたり

自作なれ歌集編まんと読みおれば脳裡を去れる歌よみがえる

一人にて鎌倉旅行に出かけたる中二の男孫電話掛け来る

裸木に冬はなれるも百日紅盛夏八月紅花日々増す

わが妻に末期の水を与えざる急患室ゆえ心残るも

月遅れ盆も終りて季は秋に稲穂出揃い早生は垂れ初む

怖くない

怖くない顔の増えたりわが巡り平和な社会の
反映ならん

保険なく医は臨終の時のみの時代を我は知ら
ず過ぎ来し

世紀末地球は一つと言われ初む二百余国が住
み分けながら

心地好い涼気のよぎる入り日時に日課の散歩
の時間をずらしぬ

断層を露に見せる終戦日知らない人々年々増え行く

侵略を巡る評価の今もって決まらぬ日本の不思議さ思う

中・韓の国から見れば事実なる侵略なるも日本は分れる

遊芸の人々ようやく増えて来た国かと思う巡り眺めれば

玉砕の声すらあった国なるに平安保ちて半世紀経ぬ

言靈の

言靈の宿ると言われる国ゆえか汚を扶^{たす}る短歌
容易に世に出ず

戦争がなければすべて良しとするミリタリ日
本に生れた我ゆえ

タブーなき国とはなれり天皇も福祉も農も聖
域外され

終焉を知るのは本人でないのが自然が与えた
救いであらう

言の葉に溺れてしまったわが一生朗詠までする老とはなれり

わけもなく覗きて見たるパチンコ店玉の騒音耳に迫れり

古い人らのフォークダンスに興ずるを垣間見たり福祉センターに

詠むならばやはり歌集にしなければ母の作品一首も残らず

分野毎細分化するこの文化専門馬鹿にならざるをえず

その日をば

その日をば境に暑さ衰うとう「処暑」は過ぎ
たりけさは小雨に

列強のひしめきあつた今世紀殺戮^{りく}行為も桁を
外れた

人離れだけは容易にできぬ我子離れ名離れ進
んでいるも

その人の呼吸と思えば文体は理解できるし受
け入れやすい

生ありて七十歳にミリタリと平安共々知る我
となる

謝の気持あらぬといわぬも「五体健」時には
忘れる我にてありぬ

妻逝きて心揺れいる日々なれど歌材くれたと
時には謝せん

物書きは夢ではあつたが散文のそれではなく
て短歌になりぬ

二年前還らぬ旅出の妻なれど次第に消え行く
暮らしの中より

戦死から

戦死から事故死に変わった社会記事いつか来た道そんな感抱く

戦場となり基地となった沖縄はミリタリ日本の末路引き継ぐ

原爆で富国強兵吹き消され文化平安定着したら

処暑過ぎて初秋の気配濃くなりぬ稲穂色づき栗の実太りぬ

涼しさにつられて街のデパートへ文具を一・
二探して歩く

処暑よりは低温・降雨に様変わりカラカラ天気
が影を潜めぬ

整形の外科医増えたりわが巡り高齢社会に備
えてかのように

この日々も過ぎ去り見ればあしたには恐らく
小さなドラマに見えん

強兵の国是が昭和に肥大して世界を敵にあだ
花咲かせり